

深い学びの実現に向けて

ー 協同学習を基盤とした学び合いについて ー

中島 淳
教育実践高度化専攻
教育方法開発コース

1 テーマ設定の理由

児童が学びを深めるためには、学び合いを通じた他者との関わりを通して新たな発見をすることが大切である。さらに授業における学び合いを成立するために、その基盤となる学級の組織づくりを重視したいと考えた。そこで、共に高め合う学級集団づくりを行うために協同学習を基盤にしたいと考え、副題に取り入れた。

協同学習とは「学校のすべての場面における子どもの学習に対する支援の基盤にある基本原理に関する理論」¹⁾であると杉江氏は定義している。また、協同について学校での学習に即して言い換えると「学習集団のメンバー一人ひとりの成長が互いの喜びであるという目標のもとで学習する場合」²⁾を示すとされている。私は、授業で学び合いを行い、成立した学びにするには、安心して話せる環境、つまり学級づくりが大切であると考え。学び合いでは、学び合う中から、互いの意見を聴き合い、自分の考えと比較検討し、擦り合わせて考えていくことが求められる。そのため互いを尊重し合いながら「学び合い・高め合い・認め合い・励まし合う」学級集団づくりを目指していくことが重要である。

本研究では視点1として、学び合いを通して、子供同士がつながり、高め合い、発展し、共に育つ課題解決集団を形成できる学び合いを軸に研究を進めていく。そのために、昨年度研究を行った「単元を貫く学習課題を軸とした問題解決的な授業の在り方」についても引き続き研究を行い、児童の学び合いによる思考の変容や深まりを見取っていく。さらに学級経営の視点を加え、学級における人間関係づくりや、話し合いの在り方なども合わせて考えながら研究を深めていきたいと考える。学び合いの方法や効果を研究する中から児童の学びの深まりについて考え、研究を進めていきたい。

さらに視点2として、学び合いによる児童の思考の深まりや、協同学習を取り入れた学級経営の方法について教員間で共有を図ることで、学校全体へ取り組みを広めていく。私の勤務校は、昨年度から「自分の思いや考えを表現し、学び・高め合える児童の育成～『なかめるタイム』を通して～」という研究テーマのもと、学校全体で校内研究に取り組んでいる。本校における「なかめるタイム」とは授業における児童のグループによる学び合いを指し、考えの幅を広げたり深めたりするために、児童が主体的に自他の意見や考えを交流しながら行う活動を指す。このなかめるタイムを授業に取り入れながら、どのような学び合いができるか、そして学び合いが児童の深い学びにつながるよう研究している。この研究内容は私の研究テーマと重なり合う部分があり、校内研修とも連携をしながら自身の研究を進めていく。

2 基本的な考え方

(1) 対話的な学びと協同学習

対話の基本は互いの話を聴き合うことから生まれると考える。そもそも対話を成立させるためには、子供たちが本気になって突き詰めたい、考え抜きたい対象となる課題があることからスタートする。その課題に対して自分はどう考えるか意見をもつことが大切である。石井は、対話とは「子どもの存在が他者の存在とつながり、多くの他者とともに学ぶという人間的な行為によって生まれるもの」³⁾であると述べている。

つまり、対話を通して自分もっていない異質なもの（見方・考え方）との出会いが学びを深めるチャンスであると捉える。石井は「仲間の『わからなさ』に寄り添って対話することによって学びの深まりが生みだせる」⁴⁾と述べている。学びを深めるためには、結果だけを求めるのではなく、学び合いの過程で考えを出し合い、自分の考えと比較検討し、擦り合わせていくことが大切になるのである。そのため対話が可能になり、学び合いを通して学びが深まるためには、誰もが対等で、誰の考えにも耳を傾け、他者との違いを大切にし、わからないという意思表示ができる安心・安全な学級集団の土台をつくっていくことが重要であるとする。

（２）ソーシャルスキルと協同学習

ソーシャルスキルとは、「人間関係に関わるすべての技術のこと」で「だれもが皆、人と関わ合う中で、経験しながら後天的に獲得していきます」⁵⁾と岩澤は述べている。しかし、近年子供同士の関係が希薄化していると言われており、社会構造の変化による体験不足が課題となっている。

そこで、日常の学級活動や道徳などでソーシャルスキルトレーニングを取り入れ、相手の立場や気持ちを想像することや仲間とともに学び合う活動など、児童の心を育てるグループワークを積極的に取り入れていく。これらの取り組みは、児童同士がつながり、高め合い、発展し、共に育つ課題解決集団の形成を目標とする協同学習の学びにつながるものである。

３ 実践の概要

（１）主題に迫るための手立て

①ソーシャルスキルトレーニング

学活や道徳の時間を用いて、ソーシャルスキルトレーニングの実践を行う。道徳の時間を中心にロールプレイや、心情理解の学習の充実に努め、多様な考えや意見、様々な視点からものの見方ができるように働きかけていく。さらに、学活等でグループによる合意形成体験や話し合い活動など、人に伝えることの楽しさや、必要性、伝えるための表現の在り方を学び、よりよい人間関係形成に関わる土台をつくる。

②協同学習の考えを取り入れた学び合い

本研究では、グループによる学び合いを深めるために、個人とグループの責任に相互作用が生じることで、個人が責任をもって学習に取り組める全員参加型の環境づくりに努めていく。

本研究の実践１では、グループを超えて情報交換することができる「ジグソー法」の学習方法を取り入れる。それぞれがエキスパート活動で理解した内容を説明し合うことで、未知の知識や考え方を互いに聴き合う必要性のある学び合いを行っていき、学習内容を深めていけるようにする。

③単元全体の学習の深まりを見る

単元の「学びのあしあとシート」（振り返りシート）を第１時の授業で配布し、児童に単元全体の

学習内容を示しておく。そうすることで、児童が単元学習後に目指すゴールの姿が見えるようにして、本単元の学習に見通しと意欲をもって取り組めるようにする。

また単元を貫く学習課題に対して、振り返りシートに記入する欄を設けて児童が記入できるようにする。そうすることで、毎時間の振り返りで、単元を貫く学習課題を意識した振り返りができるようにする。さらに、第1時の授業の終末に単元を貫く学習課題に対する現時点での自分の予想を書き、単元学習後に、もう一度学んだことを基に単元を貫く学習課題に対する自分の考えをまとめる活動を行う。この活動を通して、単元学習前と学習後の、児童の記述の変化を捉え、どのように学びを深めたのか、研究していく。

(2) 実践の概要

小学校5学年社会科を中心に実践を行った。教科担任制で授業を行い、社会科の授業実践は4学級で実施をした。なお、本研究成果については年間を通して担任する学級での研究をまとめたものである。

実践1は学級活動におけるソーシャルスキルトレーニングの授業実践を行った。社会科の授業においては、実践2「あたたかい土地の暮らし」（5時間扱い）、実践3「自動車をつくる工業」（8時間扱い）の実践を行った。また実践4として校内研修や授業公開を行い、研究成果の共有をした。

本実践の実践1から実践3は視点1の内容、実践4は視点2の内容についての研究である。なお授業公開も行っているので実践2と実践3は、視点2とも重複する研究となっている。

4 実践の考察

(1) ソーシャルスキルトレーニングの実施

グループによる学び合い活動をスムーズに行うためには、伝え合うことのよさや、楽しさを児童が実感できるようにしたいと考えた。そのため学活の時間や道徳の時間、朝の活動などでロールプレイや合意形成体験を実施した。ここでは4月に学活の時間に実施した実践1「わたしたちのまち」について考察をする。活動は個人に配られた数枚の情報カードの情報をもとに、未完成の地図に必要な素材（学校や橋など）を正しい位置に置いて正しいまちの地図を完成させるゲームである。個人の情報カードは、それぞれの情報をつなげていくことで、有効な情報となっていくものである。

活動の様子を見てみると、中心となって進める子がどのグループにもいて、情報を整理しながら活動を進めている様子であった。話すことが苦手な児童に対しては、丁寧に話を振り、苦手な子も自分の言葉で伝えようとする様子が見られた。自分の情報を伝えることで地図が完成し、みんなの役に立つという体験から、伝えることの楽しさや聴くことの大切さを実感しながら生き生きと活動を行っていた。グループワークを通して、児童が話したいと思える雰囲気を作ることや、仲間と協力することの大切さを考える機会となり、学び合いの土台をつくることができた。

(2) 協同学習を取り入れた学び合い

実践2「あたたかい土地の暮らし」では、ジグソー法を用いた学び合いを行った。話合いが単なる答えの確認ではなく必要感のある内容について伝え合うことで、互いの児童は、新たな知識を手に入れることができ、学び合いがよりよく生かされていた。また、初めに個人思考の時間をしっか

りと設け、その後にペア、全体と話合いの形態を変えていったので、どの子も自分の考えや意見をもち、発言することができていた。個人思考の時間を取ることで、自分の考えをしっかりとつとができ、自信をもってグループ活動に児童が取り組めるようになったと考える。

（３）単元を貫く学習課題に対する児童の思考の変化

実践３の「自動車をつくる工業」では、単元を貫く学習課題（単元課題）に対する児童の考えの変容について研究を行った。

第１時学習後における単元課題に対する記述では、機械化や人を増やすなど、工場で行えそうな工夫についての記述が多くみられた。単元学習後の記述では、安心や安全などの具体的な自動車会社における取り組みが取り上げられるとともに、生産者だけではなく、新たに消費者という視点が多くの児童に取り上げられていた。本単元を通して、消費者という新たな視点も取り入れながら、様々な角度から自動車生産に対する見方や考え方を深めながら学習をすることができた。また全体的に文章の記述量が増えた。始めは記述の少なかった児童も、学習を通して自動車生産についての知識や技能を身につけ、学び合いによって他者と意見を交流し、自身の意見と比較をしながら自身の考えを深めることができていたことが伺える。単元を貫く学習課題を軸とすることで、問題解決的な学習を充実させ、児童の学びを深めることにつながるものが本変容から読み取れる。

（４）実践成果の共有について

実践成果の共有のため校内研修の実施と、授業実践の公開を行った。

校内研修では、研修を通して児童同士の関係作りの大切さや、深い学びとの繋がりが実感でき、よりよい学級経営の在り方について改めて考える機会とすることができた。

授業実践公開については、授業を基に分科会が行われ、社会科の授業づくりについてたくさんの意見を交流する様子が見られた。授業づくりにおいて単元で考えることの大切さや、学び合いの方法などを共有して、よりよい授業づくりを考えるための分科会とすることができた。また校内研修とも連携をしたことで、本校教員同士で授業づくりについて意見交換をする機会を多くもち、授業についてより話しやすい協力しやすい環境をつくることができた。

５ 今後の課題

本研究を通して深い学びを行う上で、学び合いの時間配分や、個人の思考の見取り方、合意形成のあり方が課題となった。今後も研究を深めながら、児童が学びたいと思える授業をつくれるように取り組みを継続し、発展させていきたい。

注

1) 杉江修治『協同学習入門－基本の理解と 51 の工夫』（2011 年、ナカニシヤ出版）p.20

2) 同書 p.19

3) 石井順治『「対話的学び」をつくる－聴き合い学び合う授業』（2019 年、ぎょうせい）p.168

4) 同書 p.14

5) 岩澤一美『クラスが変わる！子どものソーシャルスキル指導法』（2014 年、ナツメ社）p.2